

中医鍼灸処方

[中医鍼灸処方について]

鍼灸治療には様々な施術スタイルがありそれぞれ治療選穴の考え方が違う。ここでは、中医学の観点から鍼灸施術を行う際の選穴処方学を紹介する。講義数の都合もあるので今回は「気血津液病証処方」「臓腑病証処方」「対症処方」を中心に学習していくものとする。

[理・法・方・穴・術]

中医学臨床実践（湯液）の中で貫かれている原則に“**理法方薬**”という言葉があるが、中医鍼灸では“**理法方穴術**”という言葉が使われる。これは診断治療の全過程における5つの基本内容である。

理 : 理論、中医理論のこと
法 : 診法・治法、診察・弁証とそれに基づく治療原則のこと
方 : 処方
穴 : 経穴
術 : 刺法灸法

“理・法・方・穴・術”を応用し、疾病の病因病機を明らかにし、予防措置や鍼灸施術を確定する方法論である。

[処方法則]

1. 局部整体兼顧

鍼灸治療では、必ず[**局部**]治療と[**整体**]治療を結合させなければいけない。これが局部整体兼顧の考え方である。

身体のある部位の症状は往々にして整体性の疾病の一部である。例えば、喉の痛みがある時には、喉局部の病理表現以外に、肺・大腸・胃・脾・心・腎・三焦等多臓腑の疾病の兼症で良く見られることは既に学習してきた通りである。

鍼灸処方を考えるときには、十分に局部と整体の関係を考慮し、局部病症と関連する臓腑・経絡・気血津液等の失調に対する治療処方を確定しなければならない。

経穴にせよ奇穴にせよ阿是穴にしても取穴部位の局部病症に対する治効があるが、整体治療を考えるならば臓腑弁証・経絡弁証・気血弁証等を通して関連臓腑・経絡を確定し、相応な経穴を選出する必要がある。

2. 経穴主補の区別

完成された良い処方には[**主穴**]と[**補穴**]の区別がある。主穴というのは処方の主要目的に対するもので、補穴とは主穴がその治療目的を達成できるように補助するもの、或いは兼症に対して選択される経穴である。

急則治標においては治標の経穴が主穴となり、緩則治本においては治本の経穴が主穴となる。標本同治の場合には治本(と)治標の経穴が主穴となる。

どの疾病においても必ず基本の処方があり、さらに様々な兼症に応じて配穴する。この基本処方が主穴であり兼症への配穴が補穴になる。例えば胃脘痛では、中脘・足三里・内関・胃兪等のどのタイプに対しても使用する胃脘痛の基本選穴がありこれを主穴とし、弁証や兼症に基づいて補穴を配穴する。飲食停滞であれば下脘・天枢；肝気犯胃であれば太衝；気滞瘀血には膈兪・膻中；脾胃虚弱には脾兪；脾胃虚寒には気海・関元；胃陰不足には内庭等を補穴として配穴する。

3. 刺法灸法の結合

鍼灸処方を確立するには、選穴処方だけでなく刺法灸法の選択まで考慮しなくてはならない。各種の刺法灸法の基本治療原理は“ **平衡陰陽** ” “ **調整臟腑** ” “ **疏通経絡** ” 等全て同じであるが、刺法灸法が違えばその特徴やそれに適した経穴などが変わってくる。したがって、鍼灸処方を組み立てる際には「 **術** 」との結合を忘れてはいけない。

毫鍼刺法は鍼灸臨床において用いられることが最も多い刺法であり、大多数の経穴がその使用に適している。但し、処方を組み立てる際に、目的としている治療効果が達成できるよう経穴と適した補瀉法を選択しなくてはならない。例えば、循経感伝(経絡に沿って鍼感を伝える)の効果を行うには行気の手技を病のある経絡の原穴に対し施すべきであり、行気の手技は原穴で励起された経脈の気を病変部位に伝えるのに適している。もしも病状から“焼山火”や“透天涼”などの手技を行う必要がある時には、この手技に適した筋肉の豊富な部位の経穴を選択する必要がある。

灸は主に虚寒病症・慢性病症・頑固な病症で応用されることが多い。(中医鍼灸では)これらの病症のなかで鍼治療の効果が顕著でない場合にそれを補う為に用いられている。灸法では補益作用の高い経穴が用いられることが多く全身の補益に著効がある。例：**神闕**・**気海**・**関元**・**命門**・**足三里** 等

[特定穴の配穴応用]

1. 原絡配穴

：原絡配穴とは原穴と絡穴の配合応用である。常用の方法には“表裏経原絡配穴”と“同経原絡配穴”の2種類がある。

(1) 表裏経原絡配穴

原穴は、原気が通過し留まる部位であり、絡穴は表裏経の連絡点である。また、表裏原絡配穴の根拠は表裏経が絡脈により相互に連絡しており、臓腑に対してもそれぞれに属絡関係がある。故に原絡配穴はそれぞれの作用を高める効果があり臓腑病治療時の主要配穴の一つである。

配穴の応用時には表経にしても、原穴を主とし絡穴を客とすることから、“**主客配穴**”とも呼ばれる。

配穴原則としては：

- ① 臓腑経絡の先病と後病に基づく考え：先病を主とし、その原穴を取る；後病を客としその絡穴を取る。（例－肝火上炎による頭痛・目赤・耳鳴では肝の実熱が胆に影響し、肝胆火旺を引き起こし発症しているの、肝が先病でありその原穴の太衝を“主”とし、胆を後病としその絡穴の光明を“客”とする。）
- ② 病変臓腑に基づく考え：病変臓腑の原穴を選びそれを主とし、表裏関係にある臓腑の絡穴を客とする。（例－肝血虚により目の乾き・視力の低下が生じている場合、病変は肝に起きているので、肝経原穴の太衝を選びそれを“主”とし、胆経絡穴の光明を配合しそれを“客”とする。）

《表裏経原絡配穴表》

五臓病	原 穴	絡 穴	六腑病	原 穴	絡 穴
肺 病	太 淵	偏 歴	大腸病	合 谷	列 缺
脾 病	太 白	豊 隆	胃 病	衝 陽	公 孫
心 病	神 門	支 正	小腸病	腕 骨	通 里
腎 病	太 谿	飛 陽	膀胱病	京 骨	大 鍾
心包病	大 陵	外 関	三焦病	陽 池	内 関
肝 病	太 衝	光 明	胆 病	丘 墟	蠡 溝

(2) 同経原絡配穴・・・[国試問題で原絡配穴と言えよこちら]

同一経の原穴と絡穴の配合応用である。

“初病は経にあり、久病は絡にあり”及び“久病多虚”と言われるように、外感や内傷により生じた多種の慢性疾患は病が経脈から絡脈におよんでいる状態だと言われる。故に治療時には該当経絡の原穴を選ぶのと同時に、本経の絡穴を配合し効果を高めることが多い。（例－久咳には肺経原穴の太淵に絡穴の列缺を配合する。心悸・胸痛には心包経原穴の大陵に絡穴の内関を配穴する。等）

《同経原絡配穴表》

五臓病	原 穴	絡 穴	六腑病	原 穴	絡 穴
肺 病	太 淵	列 缺	大腸病	合 谷	偏 歴
脾 病	太 白	公 孫	胃 病	衝 陽	豊 隆
心 病	神 門	通 里	小腸病	腕 骨	支 正
腎 病	太 谿	大 鍾	膀胱病	京 骨	飛 陽
心包病	大 陵	内 関	三焦病	陽 池	外 関
肝 病	太 衝	蠡 溝	胆 病	丘 墟	光 明

2. 愈募配穴

：愈募配穴とは同一臓腑の背愈穴と募穴の配合応用のことを指す。

背愈穴と募穴は臓腑の気が運ばれ集まる部位であり、臓腑との関係が極めて密接である。そのため、臓腑の病が反映されるだけでなく、臓腑機能の調節が可能であることからしばしば臓腑病の治療に用いられる。

《愈募配穴表》

五臓病	背愈穴	募 穴	六腑病	背愈穴	募 穴
肺 病	肺 愈	中 府	大腸病	大腸愈	天 枢
脾 病	脾 愈	章 門	胃 病	胃 愈	中 脘
心 病	心 愈	巨 闕	小腸病	小腸愈	関 元
腎 病	腎 愈	京 門	膀胱病	膀胱愈	中 極
心包病	厥陰愈	膻 中	三焦病	三焦愈	石 門
肝 病	肝 愈	期 門	胆 病	胆 愈	日 月

3. 原原配穴

：五臓六腑の原穴を陰陽上下に配穴する方法である。五臓病に有効であり、特に主要症状として体表器官に反応が現われているものに効果がある。

部位で見ると、内が陰・外が陽である陰経経穴の主治は臓腑疾患に重きがあり、陽経経穴の主治は体表疾患に重きがある。臓腑疾患により体表器官に主な反応が現われている場合、陰経原穴を選ぶのと同時に陽経原穴を配合し効果を増強させるべきである。一般的に“少陰には少陽を”“太陰には太陽を”“厥陰には陽明を”配合する。

例：陰虚肝旺により発生した眩暈であれば、その病位は主に肝である。また、大部分の症状は頭目に反映されているので、足の厥陰経原穴の太衝に手の陽明経の合谷を配合（四関穴）する。

《原原配穴表》

少陰配	①	少陰経	少陽経	太陰配	①	太陰経	太陽経	厥陰配	①	厥陰経	陽明経
		少陽	②			神門	丘墟			太陽	②
		太谿	陽池			太白	腕骨			太衝	合谷

4. 愈原配穴

：愈原配穴とは同一臓腑の原穴と相応の背愈穴の配穴である。

原穴は臓腑病の治療に効果があり、背愈穴もまた臓腑病の治療に効果がある。故に両者は主治症に共通性があり、相互にその療効を増強する働きがある。

例：気虚咳嗽には肺経背愈穴の肺愈に肺経原穴の太淵を配合する。

腎虚証による遺精であれば腎愈と太谿を選穴する。

5. 募合配穴

：同腑の募穴と下合穴の配合である。

募穴の主治は六腑病であり、下合穴の主治も六腑病である。故に両者を配合しその療効を増強させる配穴である。

例：胃脘痛には中脘・足三里を選穴し、下痢・便秘には天枢・上巨虚を選穴する、等。

《募合配穴表》

臓腑	募合配穴		臓腑	募合配穴	
	募穴	下合穴		募穴	下合穴
大腸	天枢	上巨虚	膀胱	中極	委中
胃	中脘	足三里	三焦	石門	委陽
小腸	関元	下巨虚	胆	日月	陽陵泉

6. 原合配穴

: 原穴と合穴（或いは下合穴）の配合応用である。常用の方法には以下の3通りがある。

(1) 同経原合配穴

同経の原穴と合穴の配合応用である。

例：合谷と曲池の配合を風熱による頭痛や鼻衄、歯肉腫痛に用いる。

太白と陰陵泉の配合を脾虚湿盛の食少便溏、下肢の浮腫等に用いる。

(2) 表裏経原合配穴

表裏経の原穴と合穴の配合応用である。

陰経の原穴に陽経の合穴（或いは下合穴）を配合することが多い。

例：太白と[足三里]の配合で脾胃失和による悪心・嘔吐・腹脹・泄瀉を治療する。

太衝と[陽陵泉]の配合で肝胆火旺による頭暈目眩・口苦耳鳴・目赤腫痛・胸脇疼痛等を治療する。

(3) 異経原合配穴

異経原合配穴の応用範囲はとても広い。

例：太衝と足三里の配穴で肝胃不和証を；合谷と足三里の配穴で胃腸積滯を治療する。

7. 郄募配穴

: 郄穴と募穴の配合応用である。

主に臓腑の急性病症に用いられる。

例：[中脘]と[梁丘]の配合を急性胃脘疼痛に用いる。

8. 郄会配穴

: 郄穴と八会穴の配合応用である。

主に臓・腑・気・血・骨・髓・脳・脈の急性病症に用いられる。

例：気逆咯血に[孔最]・[膻中]の配穴を、崩漏に[地機]・[膈俞]の配穴を用いる。

[気血津液病証処方]

1. 補気方

組成	気海・足三里・膻中	
機能	補気	
操作	鍼による補法；或いは鍼灸併用	
主治	気虚証	
方意	気海	下焦に位置し、生気の海と呼ばれる。原気を補う。
	足三里	補脾胃気。後天を高め生気を促す
	膻中	気会穴。上焦に位置し、上気海と呼ばれる。調肺益気。

2. 行気方

組成	膻中・内関・合谷・太衝	
機能	理気解鬱	
操作	鍼による平補平瀉；或いは瀉法	
主治	気滞証	
方意	膻中	上気海と呼ばれ、気病の要穴
	内関	調三焦気 * 配膻中：理気的作用を高める
	合谷	調気行気
	太衝	疏調気機 * 配合谷：原原配穴 疏肝理気・調気和血

3. 和中降逆方

組成	中脘・足三里・内関・膈兪・翳風	
機能	調中理気、和胃降逆	
操作	鍼による平補平瀉；或いは瀉法	
主治	呃逆、噯気、悪心、嘔吐	
方意	中脘	募合配穴：和胃降逆
	足三里	
	内関	寛胸理気
	膈兪	利膈止逆
	翳風	呃逆治療の経験穴

4. 昇陽挙陷方

組成	百会・気海・脾俞	
機能	補中益気、昇陽挙陷	
操作	鍼による補法；或いは鍼灸併用	
主治	気陷証	
方意	百会	昇陽挙陷
	気海	生気の海、益気
	脾俞	健脾益気

5. 補血方

組成	膈俞・肝俞・足三里・三陰交	
機能	養血調血、益気生血	
操作	鍼による補法	
主治	血虚証	
方意	膈俞	血病の常用穴
	肝俞	肝蔵血 *配 膈俞：養血和血
	足三里	健脾胃、益気生血
	三陰交	

6. 活血化瘀方

組成	膈俞・血海・合谷	
機能	疏通経脈、活血化瘀	
操作	鍼による平補平瀉；或いは瀉法 / 膈俞・血海は刺絡出血法も可	
主治	瘀血証	
方意	膈俞	血病治療の要穴
	血海	活血要穴
	合谷	行気導滯、通経活絡

7. 補気養血方

組成	気海・膈兪・足三里・三陰交	
機能	益気養血	
操作	鍼による補法；或いは灸法	
主治	気虚・血虚	
方意	気海	生氣の海、益気
	膈兪	血の会、養血
	足三里	補益脾胃、気血生化の源を補う
	三陰交	

8. 行気活血方

組成	膻中・膈兪・合谷・太衝	
機能	疏経通絡、行気活血	
操作	鍼による平補平瀉法；膈兪には三稜鍼点刺法	
主治	気滞瘀血証	
方意	膻中	気の会膻中と血の会膈兪を配合し、行気活血。
	膈兪	
	合谷	四関穴；疏調理気・・・気行則血行
	太衝	

9. 祛痰化濁方

組成	中脘・足三里・豊隆・陰陵泉	
機能	理気和中、化痰降濁	
操作	鍼による平補平瀉法；或いは鍼灸併用	
主治	痰濁証	
方意	中脘	胃の募穴・腑の会：理中調気
	足三里	胃の合穴：健脾和胃
	豊隆	祛痰要穴：化痰降濁
	陰陵泉	祛湿要穴：健脾利湿

10. 利水消腫方

組 成	水分・陰陵泉・外関・三焦兪・復溜	
功 能	化気利水、消腫	
操 作	鍼による補法；或いは灸法	
主 治	浮腫	
方 意	水 分	利湿効果があり水病治療の要穴と呼ばれる。
	陰陵泉	理脾健運、祛湿利水
	外 関	疏利水道、気化促進（三焦経特定穴）
	三焦兪	
復 溜	利水消腫（腎経経穴）	

11. 滋養津液方

組 成	足三里、三陰交、太谿、養老	
功 能	調中生津、滋陰養液	
操 作	鍼による補法	
主 治	津液不足	
方 意	足三里	調理脾胃、生津液
	三陰交	
	太 谿	益腎養陰
	養 老	滋養津液：常用穴

[臓腑病証処方]

《 心・心包病証処方 》

1. 温陽補心方

組成	内関・郄門・膻中・心兪・気海	
機能	温心陽、補心気	
操作	鍼による平補平瀉法；灸も可	
主治	心気虚・心陽虚による 心悸・気短・心痛	
方意	内関	補法・灸法で温心陽・補心気
	郄門	
	膻中	前後呼応で局部から心を治す
	心兪	
気海	生氣の海、益気	

2. 養心安神方

組成	心兪・神門・三陰交・足三里	
機能	滋心陰、補心血	
操作	鍼による補法；或いは平補平瀉	
主治	心陰虚・心血虚による 心悸・失眠・健忘・心身不寧	
方意	心兪	養心安神
	神門	
	三陰交	滋陰養血
	足三里	補後天、気血津液の生成を高める

3. 清心瀉熱方

組成	大陵・労宮・外関	
機能	清心火	
操作	鍼による瀉法	
主治	心火亢進	
方意	大陵	心包輪穴（実則瀉其子）；心・心包実証治療の常用穴
	労宮	心包経榮穴：心・心包の実熱を瀉す
	外関	陽維脈八総穴(寒熱に苦しむ)；全身上下の熱を瀉す作用

《 肺病証処方 》

1. 補肺気方

組成	肺兪・膻中・天突・中脘・足三里・気海	
機能	補気益肺、止咳平喘	
操作	鍼による補法；或いは鍼灸併用	
主治	肺気虚	
方意	肺 兪	調肺理気；肺病治療の要穴 咳喘治療の基本選穴
	膻 中	
	天 突	
	中 脘	後天を補う；“虚則補其母” 培土生金
	足三里	
	気 海	補気

2. 滋肺陰方

組成	肺兪・膏肓・太淵・太谿	
機能	滋陰潤肺	
操作	鍼による補法；或いは灸法；或いは拔罐	
主治	肺陰虚証	
方意	肺 兪	滋陰潤肺、宣肺止咳
	膏 肓	諸虚証治療の要穴；特に利肺補虚、滋補肺陰
	太 淵	太陰経の土穴；“虚則補其母”
	太 谿	滋陰降火

3. 宣肺解表方

組成	肺兪・尺沢・合谷・大椎・背部走罐	
機能	宣通肺衛、解表退熱	
操作	鍼による瀉法、走罐法	
主治	感冒	
方意	肺 兪	局部・遠位配穴：瀉肺熱解表（寒熱共に使用可）
	尺 沢	
	合 谷	退熱解表 ：陽明経原穴・肺と表裏関係 ：全身陽経の交会穴、全身陽気を鼓舞 疏風散寒
	大 椎	
	背部走罐	疏散風邪、宣肺解表

《 脾病証処方 》

1. 健脾益気方

組成	脾兪、太白、胃兪、足三里、気海	
機能	健脾益気	
操作	鍼による補法、或いは鍼灸併用	
主治	脾気虚証	
方意	脾 兪	原兪配穴：補脾益気
	太 白	
	胃 兪	兪合配穴：健脾益胃
	足三里	
	気 海	生氣の海：補気要穴

2. 理脾化湿方

組成	脾兪、陰陵泉、中腕、足三里、外関	
機能	温中理脾	
操作	鍼による平補平瀉；或いは鍼灸併用	
主治	脾失健運、水湿内停	
方意	脾 兪	健脾利湿化水
	陰陵泉	
	中 腕	募合配穴：理脾胃、助運化；(施灸) 温中除湿
	足三里	
	外 関	通利三焦気機

3. 温胃散寒方

組成	胃兪、中腕、足三里、関元	
機能	温中和胃、祛寒止痛	
操作	鍼による平補平瀉；或いは鍼灸併用	
主治	胃寒証	
方意	胃 兪	兪募配穴：和中益胃
	中 腕	
	足三里	合穴・下合穴 (虚寒時に用いる) 補陽
	関 元	
} 温中散寒、温絡止痛		

《 肝病証処方 》

1. 養血柔肝方

組成	肝兪、太衝、足三里、三陰交、太谿	
功能	滋陰、養血、柔肝	
操作	鍼による補法	
主治	肝血虚証	
方意	肝 兪	原兪配穴：補肝陰、養血柔筋
	太 衝	
	足三里	健運脾胃、生血陽肝
	三陰交	
	太 谿	益腎填精 “精血同源”

2. 疏肝理氣方

組成	期門、太衝、陽陵泉、内関	
功能	疏肝、理氣、解鬱	
操作	鍼による瀉法、或いは平補平瀉	
主治	肝氣鬱結証	
方意	期 門	調肝(活血)、疏利脇肋
	太 衝	疏肝、行氣、解鬱
	陽陵泉	胆下合穴、筋会；疏泄肝胆、舒經通絡、理氣止痛
	内 関	寬胸理氣解鬱

3. 清肝瀉熱方

組成	期門、行間、俠谿、風池、神門	
功能	清瀉肝火	
操作	鍼による瀉法	
主治	肝火上炎証	
方意	期 門	清瀉肝火
	行 間	
	俠 谿	胆榮：清利肝胆熱
	風 池	疏肝散熱、清利頭目
	神 門	清肝瀉熱、安神除煩

《 腎病証処方 》

1. 温補腎陽方

組成	腎兪、命門、気海、関元	
機能	補腎壯陽	
操作	鍼による補法、或いは鍼灸併用、施灸が適する	
主治	腎陽虚証	
方意	腎 兪	益腎補陽
	命 門	補腎陽要穴：温腎助陽、命門真火を鼓舞する
	気 海	補気要穴
	関 元	補陽要穴

2. 補腎益気方

組成	腎兪、志室、気海、三陰交	
機能	補腎益気	
操作	鍼による補法、或いは鍼灸併用	
主治	腎気虚証	
方意	腎 兪	補益腎気
	志 室	蔵精の所：固腎渋精
	気 海	補気
	三陰交	補後天(以養先天)

3. 滋養腎陰方

組成	腎兪、太谿、湧泉、三陰交	
機能	補益腎陰	
操作	鍼による補法	
主治	腎陰虚証	
方意	腎 兪	滋腎壯水
	太 谿	補益腎気、滋陰填精
	湧 泉	滋陰瀉火
	三陰交	調補三陰、滋腎補陰；補後天

} 原兪配穴：補腎滋陰